報道関係各位

2014 年 4 月 25 日

日本メドトロニック「経カテーテルペーシングシステム」の国際共同治験において国内初めての植込みを実施

日本メドトロニック株式会社（本社：東京都港区、代表取締役社長：島田隆）は、世界最小の心臓ペースメーカとなる経カテーテルペーシングシステム（治験識別記号：MDT-1112）の治験において、国内で初めての植込みが行われたことを発表しました。メドトロニックが開発した MDT-1112 経カテーテルペーシングシステム（TPS: Transcatheter Pacing System、以下 MDT-1112 TPS）については、日本を含めた国際共同治験が進行中であり、2014 年 3 月に杏林大学医学部付属病院（東京都三鷹市）にて副島京子准教授（循環器内科）による国内初の植込みが行われました。

MDT-1112 TPS は、現在使用されているペースメーカの約 10 分の 1 の大きさであり、大腿静脈からカテーテルを用いて直接心臓内に送達されます。心臓内で留置位置を決定した後、心臓壁に固定され、必要な場合には留置位置を変更することが可能です。留置されたペースメーカは、先端にある電極から微弱な電気刺激を発することで心臓の拍動リズムを回復させます。

副島京子 准教授は、「ペースメーカには約半世紀の歴史があり、本邦でも年間約 6 万人の患者さんが植込みを受けています。従来のペースメーカは、ペースメーカ本体とリードからなっており、患者さんの前胸部の皮下に植込みを行います。そのため、リードの断線や皮膚を介しての感染などが代表的な合併症として認められています。リードのないカプセル型の小さなペースメーカは誰もが待ち望んでいたものですが、欧米と同時に本邦でも治験が始まりました。手術時間が短く、上肢の運動制限や前胸部の傷もないことから、患者さんにとって非常に期待の持てる魅力的な治療法だと考えています。将来的にはペースメーカ治療の主流になっていくと思います。」とコメントしています。

MDT-1112 TPS による治療には、これまで必要であったペースメーカ本体と心臓をつなぐ導線（リード）が不要であり、植込み術において胸部切開と皮下ポケット作製を行う必要がありません。この技術によってペースメーカ治療の合併症を減らし、患者さんの治療満足度を向上させることが期待できます。

本治験は、MDT-1112 TPS の安全性と有効性の検証を目的としており、世界の約 50 施設で 780 名の患者さんを登録する単群・多施設共同の国際共同治験です。本邦では杏林大学付属病院の他、数施設での実施が予定されています。

メドトロニックは、世界中の第一線の医師、研究者、科学者と連携して、心血管疾患と心不整脈のインターベンション治療及び外科治療に最も多くの革新的医療技術を提供しています。

【日本メドトロニック株式会社 （Medtronic Japan Co., Ltd.）について】

日本メドトロニックは 1975 年の設立以来 30 年以上にわたり、生体工学技術を応用し、慢性疾患をお持ちの方々の痛みをやわらげ、健康を回復し、生命を延ばす医療機器を通して人類の福祉に貢献することを目指しています。メドトロニックが提供する先端医療技術は、心臓疾患をはじめ、パーキンソン病、糖尿病、脊椎疾患、脳疾患、慢性的な痛みなど慢性疾患を広くカバーしています。
Web サイト http://www.medtronic.co.jp

なお、将来の業績見通しに関わるすべての記述は、メドトロニックが米国証券取引委員会に提出する定期報告書に記載されているようなリスクや不確定要素の影響を受ける場合があります。実際の業績は予想と著しく異なる可能性があります。